

〈東文研・ASNET共催セミナー〉

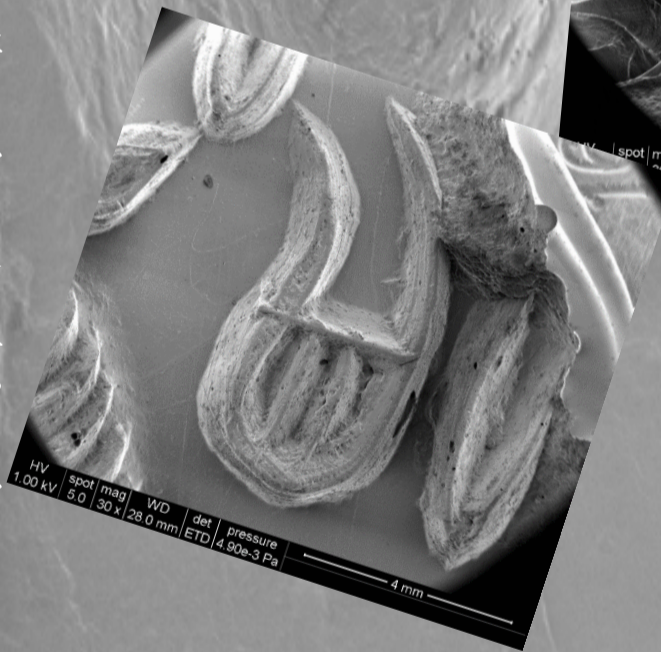
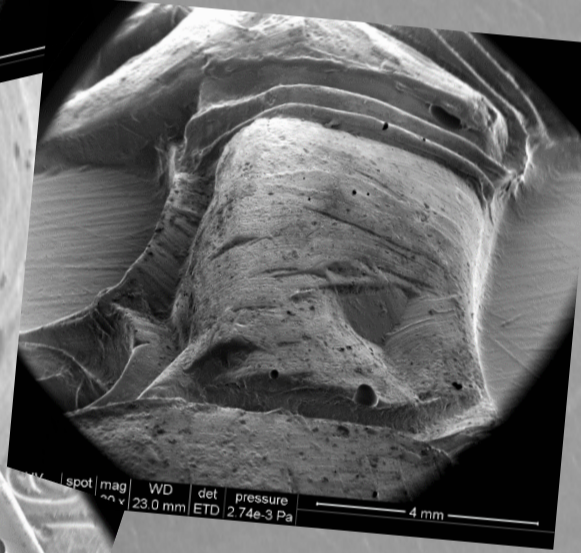
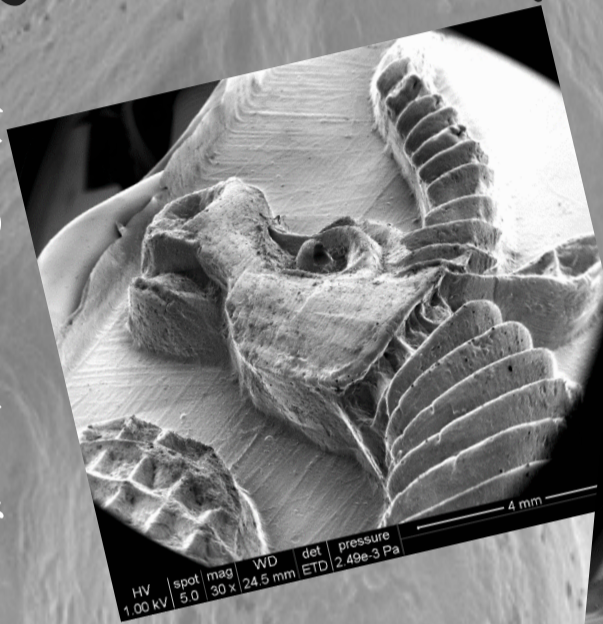
彫刻技術に基づいたインダス式印章の 分類とその意義：SEM観察と3D（PEAKIT） 解析を利用した考古学的検討

*Classification of the Indus Type Seals in Light of Their Carving
Techniques and its Significance:*

Archaeological Consideration through SEM and 3D (PEAKIT) Analyses

インダス式印章とは、印面に一角獣をはじめとする主モチーフと平均2～5文字程度のインダス文字が陰刻され、裏面に紐を通すためのつまみをもつ方形・押捺型の判子状の凍石製遺物である。インダス文明（紀元前2600～1900年頃）を特徴づける遺物の一つだ。

本報告では、当該遺物の彫刻技術を、SEM観察と3D（PEAKIT）解析を利用して考古学的に検討する。考察部分では、彫刻技術にもとづいて当該遺物を分類し、その意義について考えてみたい。



◆ 日 時： 2016年6月9日（木）17:00-18:00

◆ 報告者： 小茄子川歩氏氏（日本学術振興会特別研究員PD）

◆ コメント： 古井龍介氏（東京大学 東洋文化研究所 准教授）

◆ 会 場： 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー

※ 報告は日本語で行われます。



東京大学
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia

